中京大学　心理学研究科・心理学部紀要
第 12 号 第 1 巻（2012）161 ― 164 頁

遺稿『絵解き法（TAT）のすすめ－新たな分析・解釈法の導入』の整理過程と補足説明

関 山　徹

『絵解き法（TAT）のすすめ―新たな分析・解釈法の導入』は，鈴木睦夫教授が亡くなる前日まで執筆していた遺稿（約 24 万字）を，八尋華那雄教授（中京大学心理学部）が管理責任者となり，高瀬由嗣准教授（明治大学文学部）と小生が整理してまとめたものである。整理の方針としては，原文を尊重して可能な限り原形を残すことにし，修正は最低限にとどめることにした。遺稿の整理作業は，第 1 章から第 4 章までを高瀬が，第 5 章から第 13 章までおよび註を小生が担当し，ふたりが相互に内容を確認した上で，さらに小生が総合的にまとめて決定稿を作成した。

遺稿の原本は，鈴木研究室のパーソナル・コンピュータ（以下，PC と表記する）に保存されていた「絵解き法」という名の電子ファイルである。これは，八尋と著者の奥様が PC の内容を確認した際に，他のデータとともに発見されたものである。PC による最終更新日時は，2010 年 11 月 9 日 18 時 41 分であり，まさに著者の絶筆となった原稿であった。そこには，第 1 部から第 3 部の導入部に相当する文章（約 13 万 7 千字）が綴られていた。また，その他の電子ファイルの中には，第 3 部に採用されなかったものも含めて数例の TAT 事例も残されていた。一方，研究室等に残された紙の資料についても八尋と著者の奥様によって確認され，TAT に関するものは 15 個の段ボール箱に詰められて小生のもとに届けられた。紙の資料を小生が整理したところ，第 3 部の事例に関する詳細な記録や肉筆の草稿類が見つかり，事例情報として活用することになった。なお，第 3 部の各事例（第 10 章から第 13 章）の原本となった電子ファイルの最終更新日は，2010 年 5 月 27 日と 5 月 28 日であった。

さて，ここからは，遺稿の各箇所に関する補足説明をしていく。

第 1 部は比較的に修正箇所が少なく，特に第 5 章は完成原稿に近い状態であった。内容としては，TAT の特質や分析・解釈における基本方略が取り上げられ，第 5 章では各カードにおける物語類型の現れ方とその解釈仮説が入門者にも理解しやすいように述べられている。

第 2 部では関係相の記号化という新たな分析・解釈法が提唱されており，著者がこれまでとってきた方略を大幅に拡張する試みがなされている。そのためであろうか，原稿には不完全な箇所が散見され，特に記号化の体系において，第 7 章から第 8 章までの内容と第 9 章における内容との間に不整合がみられた。おそらく，死の直前まで筆を入れていた箇所なのであろう。結論を先に述べれば，前者の体系が最終形態であり，後者はそれ以前の古い世代のものと考えられる（なぜそのような推論をおこなったかについては，第 3 部に言及した箇所で詳述したい）。したがって，決定稿を作成するにあたって，記号化の体系に関しては，全篇にわたって前者を基準にして表記することにした（但し，第 9 章以降においては，著者の思索過程がわかるよう，括弧内に原文の記号を併記した）。

第 3 部は，第 2 部で提唱された新機軸を加えて，4 つの TAT 事例を分析・解釈していく内容となっている。読者は，事例 A（第 10 章）から事例 D（第 13 章）へと読み進めるにつれて，TAT と被検者のパーソナリティをより身近に感じられることであろう。著者自身は 10 例の掲載を予定していたようであるが，比較的に原稿が整っている 4 例を採用することにした。事例 A は，中京大学文学部紀要第 24 巻に掲載された事例と同一のものである（鈴木，1989）。20 年余の時を経て改めて解釈された内容となっているため，たいへん興味深い。事例 B と事例 C は，関係相の記号化の側面からだけでなく，反応の形式面も活かしてパーソナリティ理解が図られている点が特徴である。事例 D は，総合所見が存在せず未完の原稿であるが，事例 A から事例 C における表記とは若干異なる体系で記号化されており，著者の思考の軌跡を知る上で重要と判断し，あえて掲載することにした。熱心な読者であれば，各カードで引き出された解釈を手掛かりにして，自ら総合所見を書いてみるよい機会となるであろう。また，著者は，

Shneidman（1951）による John Doe の事例についても取り上げるつもりであったようで，その各反応について記号化したものが残されている。参考のために，その肉筆原稿をスキャンしたものを Appendix 1 として掲載した。

第 3 部の各事例，すなわち各章は，事例の概要，カードごとの反応，まとめの表（形式面のチェック表・関係相のチェック表・分析解釈シート），総合所見，という 4 つの要素と順序で組み立てられている。さらに，カードごとの反応の箇所では，①物語（TAT 反応），②物語の要約と記号化，③解釈の 3 つから構成されているが，遺稿を詳細に分析したところ，著者は必ずしもこの順番に書き上げたわけではないことが明らかになった。なぜなら，②と③における記号化の内容を比較すると，その体系が一貫して異なっていたからである。この事態を理解しやすくするために，第 2 部と第 3 部の各章において出現した関係相の記号を Table 1 としてまとめた（第 3 部の「総合」の列は，小生が便宜的に設けた）。Table 1 を見ると，記号化の体系には 5 つの世代，すなわち，第 7 章から第 8 章までの箇所で紹介されている体系，第 9 章で述べられている体系，第 3 部の事例 A から事例 D の②の箇所で使われている体系，事例 A から事例 C の③の箇所で使われている体系，事例 D の③で使われている体系があることがわかるだろう。世代間の変遷過程はおおよそのところ，③の体系が最も古く，中間段階として第 9 章と②の体系があり，第 7 章から第 8 章の体系が最終形態であると推測される。その最も顕著でわかりやすい例は，③の Disc（カテゴリーⅠ内の 1 つ）である。Disc は，第 9 章と②の世代では Ii・Sk.Sk と Iii・H.Sk に分化し，第 7 章から第 8 章では Expl と Pas-F として定式化されている。また，先述したように，電子ファイルの最終更新日を手掛かりにすると，第 3 部の事例部分は第 2 部の内容よりも時間的に前に書かれたことが確認されている。さらに，PC 内には「関係相の各カテゴリー 10.10.19」という，最終更新日が 2010 年 10 月 19 日のファイルが存在し，その内容は第 7 章から第 8 章の体系とほぼ同じものであった。したがって，やはり内容の充実の面からも最終更新日の手掛かりの面からも，第 7 章から第 8 章の内容が最も改良された状態の体系と断定できよう。

なお，PC 内に残された他の草稿類を手掛かりにすると，記号化の構想はそれ以前から練られていたことがわかる。たとえば，2009 年 12 月 4 日が最終更新日となるファイル「TAT パーソナリティ 各側面の解説 09.8.19」では，関係相の記号化の原形と思われる記述がある。興味深いのは，関係相の他に，自己像や男性像・異性像，親像，家庭環境，現実対処・適応面についての記号化が試みられていたことである。2010 年 1 月 14 日が最終更新日となるファイル「動詞の分類」では，400 個以上の動詞を分類した形跡が見られ（前日にも類似のファイルを作成している），次第に著者の関心が関係相に集中していった様子がうかがわれる。さらに，2010 年 4 月頃には，関係相のカテゴリーⅠを検討していたようである。2010 年 4 月 6 日が最終更新日となるファイル「カテゴリーⅠ」では，知りたい（見たい）・知りたくない・知ってもらいたい・知られたくないという観点から，30 以上の TAT 事例を対象に分類が試みられていた（この作業は 4 月 14 日の「カテゴリーⅠ 改訂版」まで続いている）。これに符合する出来事として，個人的なエピソードになるが，こんなことがあった。2010 年 4 月のまだ講義の始まっていない時期のことだったが，他の用件で小生が鹿児島から著者に電話を掛けた際，今こんなことを考えているということで，まさにカテゴリーⅠのアイディアを語られていた。電話でつい長話をするということは，小生との関係ではあまりないことであったので，非常に印象深く記憶に残っている。また，2010 年 8 月 8 日に開催された第 100 回 TAT パーソナリティ研究会の記念大会でも，参加者の前でカテゴリーⅠに相当する内容の一部が著者から開陳されていた事実も付け加えておきたい。

さて上述のとおり，関係相に関する記号化の体系は，第 7 章から第 8 章の内容が最終形態であることが明らかになったが，その内容は，執筆途中ということもあり完璧にできあがったものではない。著者自身が本文の中でも率直に表明しているように，とりわけカテゴリーⅣは検討の余地が残っている。第 3 部の各事例の整理をおこなった際，小生も，著者によるカテゴリーⅣの適用の仕方に若干の揺らぎがあると感じざるを得なかった。より具体的に言えば，カテゴリーⅣは，カテゴリーⅢないしはカテゴリーⅤとの兼ね合いの上で問題が生じているように見受けられた。しかしながら，記号の変遷過程を見てもわかるように，カテゴリーⅢからⅤは近縁であるため，その区別は繊細なものにならざるを得ないだろう。また，私見ではあるが，カテゴリーⅠからⅢで扱われているものと，カテゴリーⅣとⅤ，Ⅵのそれぞれで扱われているものは，関連を有しつつも異なる軸上にあるものではないかと小生は考えている。これらの問題は，小生を含めた後進の研究者が探究していかねばならない課題であろう。

最後に，PC 内に残されたファイルによれば，著者はこの遺稿の他に，パーソナリティについての著作も準備しており，「臨床パーソナリティ心理学試論」という原稿（約 13 万字；最終更新日は 2010 年 10 月 29 日）も残され

ていた。2007 年 1 月には構想が始まっており，夏目漱石『こころ』やヘルマン・ヘッセ『デミアン』等の小説も取り上げられている。こちらの原稿についてはかなり不完全な状態であるため公表はできなかったが，小生としては，TAT 研究と通底し表裏一体をなす内容であったことを記しておきたい。また，奥様の証言によれば，著者はこれらの著作の他に，さらにロールシャッハ・テストに関する書物も著す意欲をもっていたとのことである。ヘルマン・ロールシャッハのほぼすべての論文を邦訳・刊行した著者にしてみれば，ごく自然な展開であろう。著者は，病身でありながら最期まできわめてクリエイティブであった。それにもかかわらず，死は，著者の歩みの背後からあまりにも速く迫り，追い越してしまった。残念でならない。

附　記

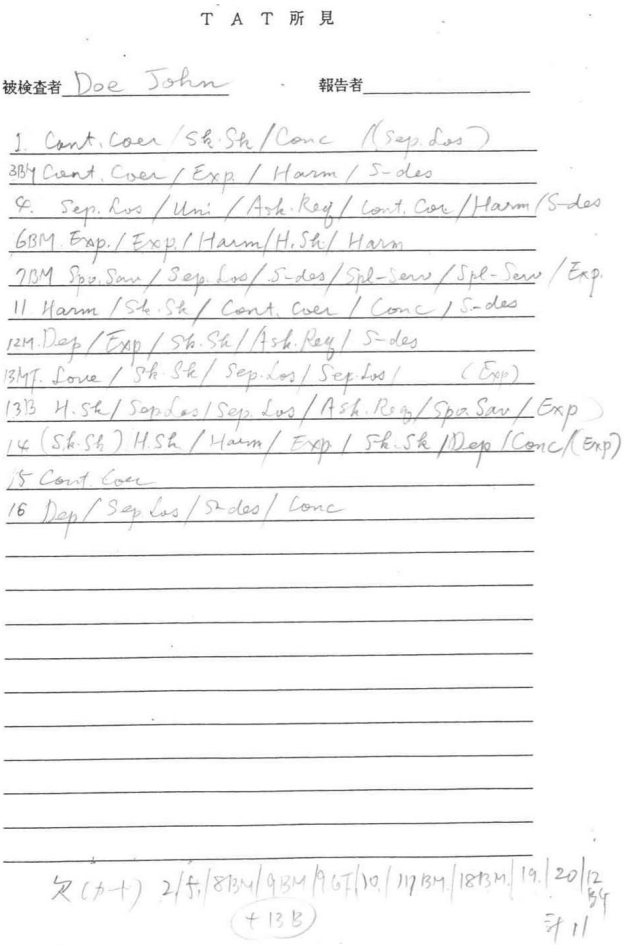
敬愛する先輩である高瀬由嗣准教授には，的確な助言をいただくとともに常に勇気づけていただきました。そして，鈴木睦夫教授と並ぶ恩師である八尋華那雄教授は，このプロジェクトを強力に推進してくださり，小生たちは安心して整理作業に取り組むことができました。この遺稿を世に送り出すことができたのは，八尋先生のご尽力によるものです。その上，なかなか進まない作業を辛抱強く見守っていただきました。大学院生の石井明子さんには印刷原稿のチェックをはじめ様々な作業を献身的に引き受けていただきました。皆様に厚く御礼申し上げます。

【文献】

Shneidman, E.S. (1951) Thematic Test Analysis. New York: Grune & Stratton.
鈴木睦夫（1989）TAT 解釈の一例(3)－強迫症状と関係念慮を示す男子青年の事例－．中京大学文学部紀要，24(1)，pp. 1-25.

（鹿児島大学教育学部）

Appendix 1　事例「John Doe」における関係相の記号化


T A T 所見

被検査者 Doe John　　報告者

1. Cont. Cover / Sh. Sh / Conc (Sep. Los)
3BM Cont. Cover / Exp / Harm / S-des
4. Sep. Los / Uni / Ash. Reg / Cont. Cov / Harm / S-des
6BM Exp. / Exp / Harm / H. Sh / Harm
7BM Spo. Sav / Sep. Los / S-des / Spl-Serv / Spl-Serv / Exp.
11 Harm / Sh. Sh / Cont. Cover / Conc / S-des
12M. Dep / Exp / Sh. Sh / Ash. Reg / S-des
13MF. Love / Sh. Sh / Sep. Los / Sep. Los / (Exp)
13B H. Sh / Sep. Los / Sep. Los / Ash. Reg / Spo. Sav / Exp
14 (Sh. Sh) H. Sh / Harm / Exp / Sh. Sh / Dep / Conc / (Exp)
15 Cont. Cover
16 Dep / Sep. Los / S-des / Conc

欠(カード) 2/4/8BM/9BM/9GF/10/11BM/18BM/19/20/12BM
(+13B)　計11

Table 1 遺稿の各箇所で出現した関係相の記号

第2部			第3部									
第7章と第8章		第9章	*総合*		第10章（事例A）		第11章（事例B）		第12章（事例C）		第13章（事例D）	
			要約	*解釈*	要約	解釈	要約	解釈	要約	解釈	要約	解釈
I	Expl	I i	Sk.Sk	Disc	Sk.Sk	Disc	Sk.Sk	Disc	Sk.Sk	Disc	–	I i Disc
	Pas-F	I ii	H.Sk		H.Sk		H.Sk		H.Sk		H.Sk	
	Expo	I iii	Exp	Exh Exp	Exp	Exh	Exp	Exh Exp(2)	Exp	Exh	Exp	I iii Exh
	Conc	–	Conc	Conc Sec	Conc	Sec	Conc	Conc	–	–	Conc	I ii Conc
II	Con/Coer	II i	Cont.Coer	Cont	Cont.Coer	Cont	Cont.Coer	Cont	Cont.Coer	Cont	Cont.Coer	II i Cont
	Ask/Req	II iii	Ask.Req	–	–	–	–	–	–	–	Ask.Req	–
	Dec	II ii	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–
	Gui	III i	Gui	Gui	Gui	–	–	–	Gui	Gui	–	II iii Gui
III	Spo/Sav	III ii	Spo.Sav	Sup	Spo.Sav	Sup	Spo.Sav	Sup	Spo.Sav	Sup	–	–
	Prov/Ser	III iii III iv	Spl.Serv	Prov	Spl.Serv	Prov	Spl.Serv	Prov	Spl.Serv	Prov	–	–
	Harm	IV i	Harm	Harm	Harm	Harm	Harm	Harm	Harm	Harm	Harm	III i Harm
	Dep	IV ii	Dep	Dep	Dep	Dep	Dep	Dep	Dep	Dep	Dep	III ii Dep
IV	Like	–	Like	–	–	–	Like	Host	Like	–	Like	–
	Hos/Disg	–	Host	–	Host	–	Host	–	–	–	–	–
	Love	III v	Love	Love	Love	Love	Love	Love	–	–	Love	III iv Love
	LoL	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–
V	Uni	III vi	Uni	Uni	Uni	Uni	Uni	Uni	Uni	Uni	Uni	–
	Sep/Los	V i V ii	Sep.Los	Sep	Sep.Los	Sep	Sep.Los	Sep	Sep.Los	Sep	Sep.Los	IV Sep
VI	Pos-F	–	S-pre (Const.Opt)	S-pre	S-pre (Const.Opt)	S-pre	S-pre (Const.Opt)	S-pre	S-pre (Const.Opt)	–	S-pre (Const.Opt)	–
	Neg-F	–	S-des (Dest.Pes)	S-des	S-des (Dest.Pes)	S-des	S-des (Dest.Pes)	S-des	S-des (Dest.Pes)	S-des	S-des (Dest.Pes)	–
VII		VI（例1） VII（例2）	Nuet IX Oth	Neut VI N-R	Neut	Neut	Nuet IX Oth	Neut	Neut IX	VI N-R	–	VI N-R